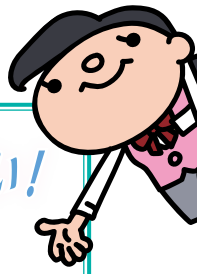

「茨城県央地域定住自立圏共生ビジョン」（素案）へご意見等をお寄せください！

水戸市では、東海村を含む県央地域９市町村（東海村、水戸市、笠間市、ひたちなか市、那珂市、小美玉市、茨城町、大洗町、城里町）で形成する「定住自立圏」の圏域を対象として、圏域の将来像や各市町村が連携して推進していく具体的取り組み内容を記載する「茨城県央地域定住自立圏共生ビジョン」の策定を進めています。この計画（素案）について、皆さんのご意見等をお寄せください。

【公表期間】

９月５日（月）～10月４日（火）

【公表場所】

▽企画経営課（役場行政棟３階）▽各コミュニティセンター ▽村公式ホームページ

【提出方法】

各公表場所備え付けの様式に必要事項を記入の上、９月５日（月）から10月４日（火）までに、持参（土・日曜日、祝日を除く）・郵送・ファクシミリ・電子メールのいずれかで、水戸市政策企画課広域行政室（〒310-8610 水戸市中央1-4-1 FAX232-9462 teiju-vision@city.mito.lg.jp）へ提出してください。

【問い合わせ】

東海村企画経営課企画政策担当（☎282-1711 内線1336）、水戸市政策企画課広域行政室（☎232-9106）

ふるさと歴訪 ～自然を探して～

ゴキブリだって愛されたい

茨城県環境アドバイザー 廣瀬 誠

東海村では、昔からどの集落周辺でも、落ち葉を集めて肥料を作ったり、樹木を利用してキノコ類を栽培したり、成木は、家屋の建築材料として活用されたりするなど、森林の恵みを生活のあらゆる面で利用していた。豊かな森林や草原が、耕作地やため池、小川、社寺林と組み合わされた典型的な景観は、まさに「ふるさと」の原型といえる。村人の暮らしと「さとやま」の生態系を構成する生き物との交流は、数千年の歴史が秘められていて興味深いものである。

七夕の昼ごろ、古墳を包む雑木林を探った。陽光が差し込み、クヌギの幹が樹液を垂らすと、スズメバチが臭気を狙ってやって来た。そんなとき、下草のシダの葉から茶褐色で体長1センチメートルほどの虫が2、3匹飛びたった。捕らえたのは、林床の落ち葉に生命を託す暖地性の昆虫・モリチャバネゴキブリである。東京周辺が分布の北限といわれていたが、分布は北上し、県内の丘陵地帯の森林にも見られる。

モリチャバネゴキブリ

旧盆の午後、須和間の雑木林で立ち枯れのクリの古木をたたいた。洞から、肢の長いカマドウマが跳び出し、私の眼鏡を蹴落とした。その後、足元のクリの倒木に手を掛け、転がしてみると、黒光りの虫がゆっくりゆっくりと地面をはって出てきた。大きさが5センチメートルを超す奇怪な虫に息をのんだ。導かれるかのように、もう1匹、黒い怪虫が続いて出てくる。手に乗せると、肢の刺で痛く、振り落とした。〝生息が森林環境の良好さを示す〟と評価され、分布の北限近い茨城県では、生息の記録が数少ない、オオゴキブリであった。これもまた、暖地性の昆虫である。

オオゴキブリ

小型のモリチャバネゴキブリ、オオゴキブリは共に、人家には侵入しない野生種である。小型種は草や落ち葉を食べ、大型種は樹木の材や巧木を食べる。同じ雑木林に暮らしていても、住み分けをしている。虫の名前であるゴキブリはゴキカブリの誤記で、語源は、〝御器かぶり〟といわれている。〝御器〟はふた付きのわん、〝かぶり〟はかじる動作のことである。残飯などを餌とし、人家にのみ生息可能となった、よく出るクロゴキブリ・ヤマトゴキブリ・チャバネゴキブリは人類と運命共同体の六脚虫である。森林のゴキブリは、これからどうなるか、見届けたい。

▼発行 東海村（村長公室広報広聴課）
〒319-1192 那珂郡東海村東海三丁目7番1号 ☎029(282)1711 http://www.vill.tokai.ibaraki.jp